

『意拾秘伝』『意拾喩言』考 ——作者、書名、底本

田野村忠温

要旨：イソップ物語の日本語と中国語への翻訳の問題は従来多くの人々によってさまざまな角度から論じられてきた。ここでは英国商人ロバート・トーム (Robert Thom) が著して出版し、中国のみならず日本におけるイソップ物語の普及にも大きな役割を果たした中国語版イソップ物語である『意拾喩言』(1840 (道光 20) 年) とその前作である『意拾秘伝』(1838 (道光 18) 年ごろ) を取り上げ、両書に関わる 3 種類の基礎的な問題——作者、書名、底本——について考察する。

キーワード：漢訳イソップ物語 ロバート・トーム 『意拾秘伝』 『意拾喩言』

1 はじめに

イソップ物語の日本語と中国語への翻訳の問題は早くから多くの人々の関心を集めてきたが¹、広範な文献学的考証および翻訳の原文と訳文の対照による分析などを通じて関連の研究の水準を過去にはなかった高みに導いてきたのが内田慶市氏による一連の研究——内田(1994, 1999, 2001a, 2001b, 2001c, 2004, 2014, 2025)など——である。内田氏の多面的にして緻密な考察は国内外の学界に知見と刺激を提供し、年々新たな研究を生んでいる。

この小論では筆者が内田氏の著述を読んで興味を覚えた若干の基礎的な問題について考察する。併せて、従来取り立てて論じられることのなかった枝葉の話にも随時触れる。

2 『意拾秘伝』と『意拾喩言』

本小論が考察の対象とするのは、入華英国商人ロバート・トーム (Robert Thom、中国名羅伯聃) が 19 世紀中葉に出版した 2 つの版の中国語版イソップ物語である。その 1 つは『意拾秘伝』4 卷 (1838 (道光 18) 年ごろ) であり、もう 1 つは『意拾喩言』、英語書名 *Esop's Fables, Written in Chinese by the Learned Mun Mooy Seen-Shang, and Compiled in Their Present Form (With a Free and a Literal Translation) by His Pupil Sloth* (1840 (道光 20) 年) である。ともに内田編著(2014) に影印が収められている。特に『意拾秘伝』はわずかしか現存しておらず閲覧も容易ではない

¹ ここで取り上げる中国語版イソップ物語の『意拾秘伝』と『意拾喩言』(詳細は後述) はそれぞれの出版の直後から西洋人の関心を集めた。イソップ物語の日中両語への翻訳の歴史という研究上の関心に基づく議論はおそらく新村校(1911)に始まる。

ことから、影印は学界に対して多大な利便を提供している。²

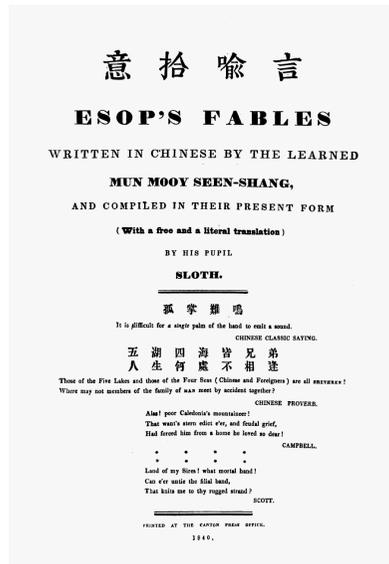


図1 トーム『意拾諭言』の扉

『意拾秘伝』では寓話がかつばら中国語で書かれているのに対し、それを基礎として編まれた『意拾諭言』では西洋人の中国語学習に使えるように対訳の英文と中国語の発音のローマ字表記が加えられている。『意拾秘伝』の中国語文はほぼそのまま『意拾諭言』に継承されているが、寓話が前者では77話であったのが後者では増補されて82話になっている。

『意拾秘伝』はイソップ物語を中国人に紹介することを目的として編まれたと考えられる。トームは『意拾諭言』巻頭の‘Preface’で『意拾秘伝』が中国人の好評を博したことを述べているが、西洋人の中国語学習に使われたという話はない。また、『意拾秘伝』の巻三が出版された時点で米国人宣教師イライジャ・コールマン・ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman、裨治文、高理文) が同人の創刊による英文誌 *The Chinese Repository*, Vol. 7, No.6 (1838年) に掲載した紹介記事も、中国人が物語を好むという話で始まり、ある中国人が同書を楽しみ読み物として賞賛したという話で締めくくられており、西洋人にとっての価値への言及はない。いずれにせよ、中国語文だけの『意拾秘伝』は西洋人の中国語学習にはあまり役に立たなかったはずである。

他方、『意拾諭言』ではすべての中国語文に意識、逐字訳両様の英文が添えられ、文中の各語に南京官話、広東語両様の発音が与えられているほか、巻頭には中国語に関する詳細な解説が加えられるなど、『意拾秘伝』から一変して当時であってほかに類を見ない懇切な内容の中国語学習書になっている。目的を変えての再出版の動機は不明であるが、『意拾秘伝』を見た西洋人

² 『意拾秘伝』は、筆者の把握の限りでは、大英図書館、ボドリアン図書館、ライデン大学図書館にあるだけである。いずれもインターネットでは画像公開されていない (2025年11月現在)。

からそれを中国語学習の材料として使いたいという要望を受けたのかも知れない。

ただし、ここには見る者を混乱させる事実がある。それは、『意拾秘伝』の巻四に至って初めてその巻頭に付せられた無題の序文は、同書を西洋人の中国語学習のために著したかのように述べていることである。しかし、巻四も以前の巻と同じ形式であり、その説明は不審である。筆者の推定によれば、その序文は当時すでに出版が決まっていた『意拾喩言』のために書いたもの——実際、同書に「叙」と題して再録されている——を『意拾秘伝』にフライング気味に載せたものである。これは単なる想像ではなく、序文の内容からそう判断することができる。³

以下の各節では、『意拾秘伝』と『意拾喩言』に関わる3種類の問題について考察する。具体的には、両書の作者、『意拾秘伝』という書名、両書に収められた特定の寓話2件の出所の各問題である。

3 『意拾秘伝』『意拾喩言』の作者

『意拾喩言』の長い英語書名については内田(2001a, 2014)に詳細な議論がある。内田(2014)からその一部を引用すれば次の通りである。

扉には、「MUN MOOY SEEN-SHANG (蒙昧先生)」と「HIS PUPUL, SLOTH (ものぐさな彼の生徒)」のように奇妙な訳者、編者名が記されており、この二者が新村氏の言われるように同一人物か否かはここでは論ずるのを避けるとして、いずれにせよ、これは英国人口バート・トームの手になるものである。

本節では、内田氏が“奇妙な”と形容している2人の作者の名に関わる問題について考える。

上の引用中に言及のある Mun Mooy Seen-shang と His Pupil Sloth が同一人物である——すなわち、作者はトーム1人である——とする新村の発言は本来論評にも値しない妄説に過ぎない。しかし、学界に一定の影響を残しているので、本節の最後で単一作者説の誤りについて述べる。

3.1 Mun Mooy Seen-shang——「蒙昧先生」?

まず、寓話の中国語文を書いた人物、すなわち、“the Learned Mun Mooy Seen-shang”に言う Mun Mooy Seen-shang について考える。

『意拾喩言』巻頭の‘Preface’および中国語を詳しく解説した‘Introduction’に述べられているところによれば、『意拾喩言』の本文は、トームが広東語を母語とする知識人である Mun Mooy

³ トームは序文で、西洋人が中国語の文章を学ぶ手立てがないことを述べたうえで、「余故特為此者，俾學者預先知其情節，然後持此，細心玩索，漸次可通。」云々と説明している。これは、序文に対訳として併記された英文にある要素も加味して訳せば、“本書を著したのは、学習者がまず中国語の基礎知識を身に付けたうえで本書を注意深く学習することで中国語の文章能力を習得できるようにするためだ”ということである。寓話の中国語文だけで構成された『意拾秘伝』にはそのような利用価値はない。

Seen-shang に寓話を官話で語り聞かせて中国語の文章に仕立ててもらい——そのようにしてま
ず『意拾秘伝』が作られた——、そこに同人の門下生たる「怠け者」(“His Pupil Sloth”)、すな
わち、トームが対訳の英文などを加えるという方法によって準備された。

内田(2014)からの引用にも見るように、学界では Mun Mooy Seen-shang を「蒙昧先生」と見な
す解釈が定説として通用している。しかし、トームが自分の中国語教師を務め、寓話の中国語
文を書いてくれた博識の人物を「蒙昧」の名で呼ぶのは言うまでもなく失礼なことであり、し
たがって不自然である。内田氏が“奇妙な”名と書いている通りである。もし Mun Mooy が「蒙
昧」であれば、“the Learned Mun Mooy Seen-shang”は賛辞 (Learned)、蔑称 (Mun Mooy)、敬称
(Seen-shang) を混合した首尾一貫しない表現であることになる。もっとも、当人が「蒙昧」を
戯号としていたということもあり得なくはないので、そのような疑問だけに基づいて「蒙昧先
生」の解釈を否定することはできない。

Mun Mooy Seen-shang を初めて漢字で書いたのは新村(1926)である。そこで新村は「ムンモイセンシヤン文盲先生」
と書いている。ただし、Mun Mooy Seen-shang をそのように解釈した根拠は示されていない。そ
して、Mun Mooy を初めて「蒙昧」と書いたのは鈴木(1927)である。鈴木は次のように書してい
る。これに続くくんだりで 19 世紀の入華西洋人宣教師の編んだ辞書数点の記述が判断の材料とし
て示されているが、後述の事情により結局のところ意味がないので引用は省く。

件の Mun Mooy Seen-Shang はスロースと同じやうに仮号であるらしい、即ち、Mun Mooy
は蒙昧、Seen-Shang は先生、之れを合せて『蒙昧先生』ではなからうか。

目立たない雑誌に想像に頼って書かれた鈴木がこの推定を翌年に断定的に書き、学界への普
及の端緒としたのが新村校注(1928)である。⁴ 新村はその巻末に新村(1926)を再録しているが、
「ムンモイセンシヤン文盲先生」を「ムンモイセンシヤン蒙昧先生」に改めている。稿末に参考文献として鈴木(1927)が挙げられてい
るので、それを見て考えを改めたのであろう。新村は Mooy は「盲」と解するより「昧」と解
するほうが漢字の発音上適切だと思ったのかも知れない。そして、「蒙昧先生」という解釈は新
村の著作に信を置いた以後の論者たちによって反復的に引用され続けることで信憑性を増し、
日本の学界から中国の学界にも伝播して国際的な定説と化した。⁵

しかし、「文盲先生」も「蒙昧先生」も単なる想像に基づく解釈に過ぎない。⁶ 我々は定説へ
の盲従の慣習を断ち切り、Mun Mooy Seen-shang が何を表しているのかという問題を証拠に基づ
いて検討しなければならない。

⁴ 鈴木(1927)の掲載誌は同人誌であり、「編輯後記」と奥付によれば 300 部限定の非売品である。

⁵ 英語による論述において「蒙昧先生」を“Mr. Unenlightened”と英訳して書いている Chan(1998, 2020)
のような例もある。

⁶ 参考までに付言すれば、呉(2000)は「盲目先生」という解釈を述べている。

まず、後半の *Seen-shang* を「先生」とする新村と鈴木の推定は正しいと考えられる。実際、『意拾喩言』の寓話中にも「先生」は何度も現れ、広東語での発音が *seen-shang* と書かれている。

しかし、*Mun Mooy* が「蒙昧」だとする解釈は純然たる誤りである。この問題を考えるうえでまず注目すべき重要な事実は、『意拾喩言』の表紙および同内容の扉の英語書名に大文字で *MUN MOOY* と書かれた名は‘Introduction’その他の本文では（これまで使ってきた *Mun Mooy* ではなく）*Mün Mooy* として書かれていることである。第1音節の母音は *u* ではなく *ü* である。*ü* の上部の補助記号は声調ではなく母音の区別を示している——『意拾喩言』における中国語の発音表記において声調は記されていない——。しかし、「蒙」の字は『意拾喩言』中に筆者の粗い確認の限りでは2度出て来るだけであるが、いずれの箇所においてもその発音は *mûng* と書かれている。*mün* と *mûng* は韻母を異にする——母音も末尾の子音も一致しない——別個の音節である。したがって、*Mün Mooy* の *Mün* は「蒙」ではあり得ない。⁷

Mün Mooy Seen-shang, kei mûng;

図2 *Mün Mooy Seen-shang* と *kei mûng*（啓蒙）

加えて、もし *Mün Mooy* が「蒙昧」という1語であれば、「先生」*seen-shang*、「奴僕」*noo-pook*、「快樂」*fai-lok* などの語と同様にハイフンを使い、かつ、後半の冒頭には小文字を使って *Mün-mooy* と書かれたはずである。人名も、「蒼頡」(伝説上の漢字の発明者の名)は *Tsang-hěě*、「子思」(孔子の孫の名)は *Tszè-szè* のように書かれている。また、「司馬遷」は *Szé Ma-tseen* と書かれており、これは「司」の1字を姓と見た誤認を背景としているが、ローマ字では英語と同じく姓と名を離して書く表記上の方針を示している。⁸ しかし、問題の名はハイフンを使わず、かつ、第2音節にも大文字を使って *Mün Mooy* と書かれている。これは、*Mün Mooy* が2語、すなわち、姓と名の組み合わせであることを示している。⁹

では *Mün Mooy* という姓名は漢字でどのように書かれるものであったのか。漢字による関連の記録を見出せない限り残念ながらそれを特定することはできないが、当の姓名が満たさなければならない条件は明確に述べることができる。まず *Mün* について言えば、『意拾喩言』で *mün*

⁷ 『意拾喩言』巻頭近くの‘Remarks’に同書における中国語の発音のローマ字表記に関する説明があるが、情報量が少なく *ü* と *û* の正確な音価が分からない。しかし、同書で *(m)ün* と *(m)ûng* という綴りがそれぞれどのような漢字の発音の表記に使われているか、そして、その漢字が現代広東語でどのように発音されるかを確かめることにより、*mün* と *mûng* の発音は推定することができる（後述）。

⁸ 論旨には関わらないが付言すれば、「蒼頡」「子思」「司馬遷」はいずれも‘Introduction’に出て来る名であり、ローマ字表記の発音は南京官話におけるものである。

⁹ ハイフンの使用と不使用、大文字と小文字の使い分けともときに不統一が見られるが、筆者の総合的な判断によればそのように考えてよい。

という発音を記された漢字には「民」「敏」、「文」「聞」などがある。いずれも^{マツゴロビン}粵語拼音方案（香港語言学学会粵語拼音字編写小組編(2002)）で man と書かれる字である——ここでは声調を示す数字は省く——。Mooy については、『意拾喩言』で mooy という発音を記された漢字は筆者の見落としがなければ「每」だけである。「每」は粵語拼音では mui であり、同音の字には「梅」「玫」「枚」「昧」などがある。したがって、Mün Mooy が表しているのは粵語拼音で Man Mui と書かれる姓名、すなわち、「民梅」などの類であることになる。

ただし、Mün Mooy は姓+名ではなく名+姓という組合せであった可能性もある。当時の西洋人が中国人の姓名をそのように英語式の順序で記した事例を筆者はほとんど知らないが、ほかならぬトームが『意拾喩言』刊行の4年後、病死の直前に出版した西洋人のための中国語学習書である『正音撮要』上巻、英語書名 *The Chinese Speaker, Or Extracts from Works Written in the Mandarin Language, As Spoken at Peking, Compiled for the Use of Students, Part I* (1846 (道光26)年)——中国人のための北京官話の学習書である高静亭『正音撮要』(1810 (嘉慶15)年初刊)などに基づいて編まれている——では、図3に見るようにその扉に「大清静亭高氏纂輯 大英羅伯聃譯述」と書かれている。このことを考えれば、Mün Mooy は Mooy Mün という姓名、すなわち、「梅敏」の類の名であったかも知れない。

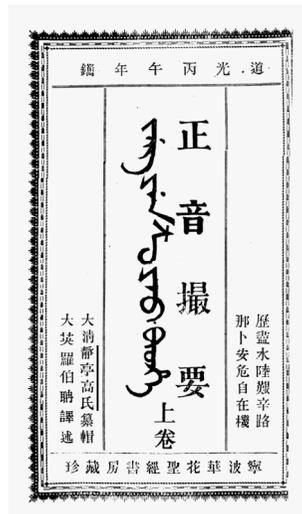


図3 トーム『正音撮要』上巻の扉

以上の議論を要すれば、Mün Mooy Seen-shang の Seen-shang は現に「先生」であるが、Mün Mooy は「蒙昧」ではあり得ず、粵語拼音で Man Mui と書かれる「文梅」のような姓名、もしくは、Mui Man と書かれる「梅敏」のような姓名を表しているということになる。それらは普通話では Min Mei、Wen Mei、もしくは、Mei Min、Mei Wen という発音になる姓名である。今後は「蒙昧先生」と書くのをやめ、「Mün Mooy」ないし「Mun Mooy」などと書かなければならない。「先生」はトームの Mün Mooy に対する敬意の表現であり、引用以外の文脈でそれを加えるのは不

自然である。今「高静亭氏が編んだ『正音撮要』」などと書く人はいないであろう。

なお、“Mūn と Múng の発音は互いに似ているだろうから、やはり MUN MOOY を「蒙昧」と見てもよいのではないか」という考えもあるかも知れない。しかし、「蒙昧」説は単なる想像の産物に過ぎず、音韻や表記に関わる事実を無視してまで墨守する価値があるものではない。MUN MOOY の発音を緩く解釈するにしても、それが「蒙昧」であることを示す証拠はない。我々がなすべきは、根拠を欠く憶説の擁護ではなく、事実の観察に基づく真相の究明である。

3.2 Sloth——筆名の心理

次に、トームの筆名、すなわち、“His Pupil Sloth”の Sloth について考える。Sloth は“怠惰、ものぐさ”を表す名詞であり、ナマケモノを表す動物名でもある。

トームは『意拾秘伝』巻四に収めた序文では「羅伯聃」と本名を名乗っているが、『意拾喩言』への再録時にはそれを「知名不具」（名前は書かなくても分かるだろうから省く）と書き換えている。トームが『意拾喩言』で本名の使用を避けた理由は不明であるが¹⁰、筆名を使うにしても「怠け者」という“奇妙な”名を選んだのはなぜなのか。それによって一種の謙遜、卑下を表していることは確実であろうが、例えば「未熟者」や「愚か者」ではなく「怠け者」という筆名にしたのはどのような思いに基づいているのであろうか。

この問題はトームの内心に関わることであり、確実なことは分からない。しかし、ある程度推測できることはある。まず、『意拾喩言』の‘Preface’中に注目に値する要素がある。『意拾秘伝』と『意拾喩言』の中国語文は、先述の通り、トームが広東人 Mūn Mooy に寓話を官話で語り聞かせて中国語の文章にしてもらおうという方法によって準備された。トームは‘Preface’で、そのような分業には長短の両面があると説明している。すなわち、外国人の犯しがちな誤りのない自然な中国語文にすることができるが、他方、生徒は怠け癖（slothful habit）を脱せず中国語を書く能力が向上しないと書いている。この限りにおいては、Sloth という筆名はトームが中国語を自身で書く努力を怠ったことを表していると解釈することができる。

ただし、トームは『意拾喩言』で初めて Sloth を名乗ったわけではない。トームはより早く、英文紙 *The Canton Register* への複数回の投書でその筆名を使っている。同紙 Vol.9, No. 42（1836年）に掲載された 1 回目の投書における署名が筆者の確認することのできたトームによる最初の Sloth の使用である。¹¹ しかし、そこにも Sloth を使った心理に関わる記述はない。投書の末

¹⁰ 『意拾秘伝』が清朝の役人に対する批判の要素を含むことが問題視されたという事情——『意拾喩言』の‘Preface’で述べられている——が関わっているという解釈も考え得るが、後述の通りトームは『意拾喩言』以外のところでも筆名を使っているなのでその説明は成り立たない。

¹¹ リバプールの牧師であった兄 David Thom の著書の 1 つである *Dialogues on Universal Salvation and Topics Connected Therewith*（1838年）にトームへの書簡が序文に代えて収められており、その中でトームが *The Canton Register* への投書に Sloth と Dust and Ashes という筆名を使っているという注記が添えられている。確認できた限りではトームは中国語に関わる投稿に Sloth を使っているが、事例が少

尾に“このような話でよければ今後は仮名 (my assumed name) を使わずにときどき投稿しようと思う”と書かれているだけである——もともと、本名による投稿は確認できていない——。

また、トームが『意拾喩言』出版の前年に出版した中国の小説の英訳版である『^{おうきょうらん}王嬌鸞百年長恨』*Or The Lasting Resentment of Miss Keaou Lwan Wang, A Chinese Tale, Translated from the Original by Sloth* (1839 (道光 19) 年) でも訳者名が Sloth と表示されている。トームは同書の‘Preface’で翻訳に関わる苦勞を説明し、“読者が誤りに気付いたら、扉に書いてある非常に謙虚な名 (the very unpretending name) を思い出してもらいたい、本小著はその名のもとに善良な人々に対して提供されるものだ”と述べている。¹² 同書での Sloth は誤りのない完璧な翻訳にするための努力を怠ったというトームの認識を表していると解することができる。

『意拾喩言』にせよ『正音撮要』上巻 (3.1) にせよ膨大な手間をかけて編まれた複雑かつ綿密な中国語学習書であり、トームは社会の通常の基準に照らせば怠慢どころか類まれな有能にして勤勉な人物であったはずである。しかし、おそらくその理想とする水準が非常に高く、そのために自己認識としては努力が足りない、怠け者だという思いが常にあったのであろう。Sloth という筆名の使用はそのような心理の反映であると筆者は推定する。さらに言えば、怠慢ではあるが能力は高いという自尊の要素を含んでいると憶測することもできる。

3.3 単一作者説の誤り

『意拾秘伝』と『意拾喩言』はトームの構想に基づく出版ではあるが、すでに見たようにトームと中国語文を書いた広東人 Mūn Mooy の共同作業による著作である。このことについて疑問の余地はないが、学界には異なる見解がある。

先に引いた内田(2014)の一節に新村の説への言及があった。新村(1926)は Mūn Mooy Seen-shang と Sloth をともにトームの自称と見なして次のように書いている。

記述者たる所謂スロース生は本名ロバート・トームといふ。^{ムンモイセンション}文盲先生と名のり門人^{スロース}懶惰生と自称したのも支那流の筆法である。

すなわち、新村は『意拾喩言』をトーム 1 人による著作と見なしている——上の記述は新村校注(1928)にも再録されているが、先に触れた通り、ここでは「文盲」は「蒙昧」に改められて

ないので筆名の使い分けの根拠は不詳である。

なお、David Thom が Robert Thom の兄であり弟でないことは *Sermons Preached in Bold-Street, and Crown-Street Chapels, Liverpool by the Late Rev. David Thom, D.D., Ph.D.* (1863 年) 中の記述によって確かめられる。そこで Robert は David の末の弟と説明されている

¹² 当該のくだりの原文は“when the gentle reader discovers a blunder, may I beg the favor of his turning to the title page, and keeping in mind the very unpretending name, under which this little work is offered to a good natured public?”である。

いる——。そして、この単一作者説は学界全体の定説にはなっていないものの、日中の学界でしばしば継承されている。筆者の確認できたものだけでも、天理図書館編(1972)、中村(1978, 1985)、佚名(1984)、李長林(1987)、^{孟のぼろ}前坊(1990)、張(1991)、施主編(1991)、辛(1992)、熊(1994)、李慶国(1994)、鮑(1995)、田島(1999)、孟・李主編(2005)、段(2007)などがある。しかし、内田(2014)がその注で控え目な調子で論じている通りそれは誤りである。

『意拾喩言』に作者が2人いることはその英語書名で明確に説明されているにもかかわらず、新村はなぜそれを虚構と見なして単一作者説を唱えたのであろうか。筆者の推定によれば、その判断は新村が Mūn Mooy が「文盲」や「蒙昧」だと思い込んだ誤りに由来する。すなわち、中国語文を書いてくれた恩人をそのような蔑称で呼ぶはずがないから、それはトーム自身の卑称に違いないと新村は考えたということである。

しかし、先に触れた‘Preface’や‘Introduction’の記述に目を通せば Mūn Mooy がトームだという見解には至り得ないし、さらに言えば、巻頭の正誤訂正や巻末の注の記述からも中国語文を書いたのがトームでないことが知られる。トームは正誤訂正において、ある寓話で「雪恨」を“bleach-white hatred”（恨みを漂白する）と英訳したのは誤りで、正しくは“thaw or dissolve hatred”（恨みを溶かす、解消する）としなければならなかった、「雪」が表すのは白い色ということではなかったと述べている。別の寓話で「化」を“to beg”（乞う、求める）と訳したことについても、それは誤りで、正しくは“to distribute”（分け与える）であったとしている。もし中国語文を書いたのがトーム自身であればこのような訂正の必要は生じなかったはずである。

また、トームは巻末の注の2つでは、寓話の中国語文中に現れる広東語の「𩶛」「唔」「辺」の各字について官話では「母」「不」「何」と書くと解説している。これもまた中国語文を書いたのがトームではなく広東人の Mūn Mooy であったことを不確実にではあるが示唆している。

「蒙昧」の解釈と単一作者説はいずれも、前書きの類すら読まず書籍の解題を書くという新村の不用意な行為、無責任な断定が後年のイソップ研究に残した負の影響である。

4 『意拾秘伝』という書名——「意拾秘+伝」？「意拾+秘伝」？

次に、『意拾秘伝』という書名について考える。この書名には、そのうちどの部分がイソップという名を表しているのかという直ちには判断の付かない問題がある。すなわち、「意拾」の2文字なのか、「意拾秘」の3文字なのかということである。もし后者であるとすれば、トームはイソップの名を当初「意拾秘」と書き、その後「意拾」に改めたことになる。

4.1 「意拾秘」説とその問題点

多くの研究は『意拾秘伝』に言及しつつもこの問題には触れずにすませているが、内田氏は「意拾秘」がイソップを表していると述べている。内田(1999)から引用すれば次の通りである。

実は筆者もこれまで『意拾秘伝』を『意拾／秘伝』と読んでいたのであるが、これは『意

「秘」は広東音つまり、モリソンの標音では「pe」であり、「意拾秘」は「Aesop」の音訳なのである。

この判断の根拠として内田氏が挙げているのは、『大英博物館所蔵漢籍目録』(科学書院、1987年)における「意拾秘伝 E-shih-pe chuan」「意拾秘伝 E shihpe chuan」という記載と¹³、『東西洋考毎月統記伝』の1838(道光18)年のある号に載った『意拾秘伝』の紹介記事における「正撰者稱為意拾秘、〜」(原作者はイソップと呼ばれ〜)¹⁴というくだりである。

同様に「意拾秘」説を述べたほかの研究を挙げれば、黄(1996, 1997)、趙(2013)、王・陳(2025)は『東西洋考毎月統記伝』の記事を引用して「意拾秘」がイソップの名だと述べている。また、Wong(2022)と Bai(2023)が *Yishimi zhuan* と書いているのは大英博物館の蔵書目録の記述に基づくものかも知れない。

しかし、ここで注意すべきは、大英博物館の蔵書目録や『東西洋考毎月統記伝』の記事の記述が信頼できるのかという問題である。それぞれの書き手はこの問題に関して事の真相を知らず——それを確実に知っているのはトームと Mūn Mooy だけである——、単に『意拾秘伝』という書名を見て各自の解釈を書いたものと考えられる。大英博物館の蔵書目録で E-shih-pe chuan、E shihpe chuan と一貫しない書き方が使われているという事実もそのような推定に符合する。

また、音韻の観点から見ても、「意拾秘」の「秘」がイソップの名の一部であるとはやや考えにくい。「意拾」の広東語での読みは粵語拼音で *ji sap*——漢語拼音式に書けば *yi sap*——であり、イソップのような発音を適切に表している。¹⁵ そして、もし聞こえ度の低い入声を補強するために *p* や *b* を声母とする音節を「拾」の後に加えるとしても、単純な韻母の字を使うのが自然であり、複韻母を含む「秘」——広東語では *bai* ないし *bei*——を使うのは少々不自然である。

4.2 筆者の推定——「意拾」

筆者の考えるところによれば、『意拾秘伝』という書名の構成は「意拾+秘伝」である。従来そのような見方を論じた研究はないが¹⁶、そのように言える理由は以下の通りである。

『意拾秘伝』において「意拾秘」という3字の漢字連接が現れるのは、各巻の表紙に貼られ

¹³ 『大英博物館所蔵漢籍目録』の底本である *Catalogue of Chinese printed books, manuscripts and drawings in the library of the British Museum* (1877年)で確認した。

¹⁴ 内田(2001a)は当該文を書名に関する記述と解しているが、本文で添えた日本語訳においては人名に関する記述と解した。この解釈の差は目下の議論には関わらない。

¹⁵ 香港語言學學會粵語拼音字編寫小組編(2002)によれば広東語に *sap* という音節はあるが *sop* という音節はない。もしトームの発音が *ji sop* に近かったとしても、*ji sap* で代用せざるを得なかった。

¹⁶ 英語による著述には『意拾+秘伝』と解釈した形になっているものがある。Chen(2017)と Bai(2019)は *Yishi mizhuan* と書いている。しかし、そう書く理由は示されておらず、著者の熟慮に基づく表記ではないと見られる。実際、Baiは、本文で先に触れた通り、Bai(2023)では *Yishimi zhuan* と書いている。

た題簽——「意拾秘伝 卷二」などと書かれている——と、巻四の序文の後に置かれた「意拾秘伝小引」¹⁷——イソップ物語に関する紹介文——の標題においてだけである。いずれも「意拾秘」の直後に「伝」の字がある文脈である。すなわち、「意拾秘」という漢字連接はもっぱら「意拾秘伝」という表現の一部としてのみ現れる。

「伝」が後続しない文脈ではイソップの名は一貫して「意拾」と書かれている。と言っても、イソップの名が出て来る箇所は限られているのであるが、まず「意拾秘伝小引」の本文は「意拾者二千五百年前記厘士国一奴僕也。」（イソップは2500年前のギリシャの奴僕である。）で始まる。また、巻四には「意拾勸世」と題した寓話が収められており、そこでは標題と本文2か所の計3か所すべてにおいて「意拾」が使われている。そのような状況の一方で題簽と「意拾秘伝小引」の標題においては「意拾」に「秘」を加えるという動機は想像しがたい。

しかも、注目すべきことに、『意拾秘伝』の序文と「意拾秘伝小引」では固有名詞——人名と地名——に傍線が付せられているのであるが¹⁸、「意拾秘伝小引」という標題における傍線は図4に見る通り「意拾秘伝小引」であり、「意拾秘伝小引」ではない。

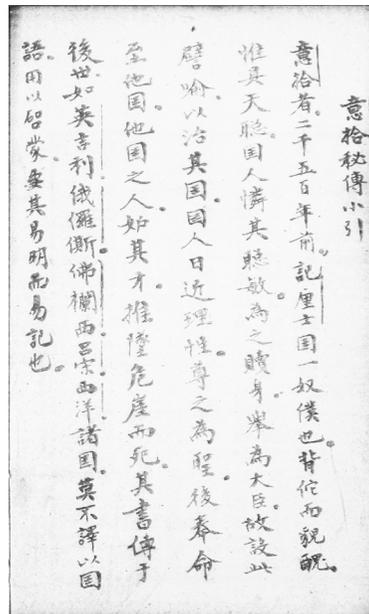


図4 『意拾秘伝』巻四「意拾秘伝小引」¹⁹

¹⁷ トームの自序も「意拾秘伝小引」もほぼそのままの形で『意拾諭言』に引き継がれている——標題は「意拾諭言小引」に変更されている——。そして、それらがともに蒙昧先生によって書かれたものであることをトームは『意拾諭言』に注の形で記している。もともと、自序も「意拾秘伝小引」も、その内容から考えて、トームの口頭での説明を蒙昧先生が文章化したものと見られる。

¹⁸ 傍線は読者による書き込みではない。一部の例外を除いて『意拾諭言』にも引き継がれている。

¹⁹ 画像は内田編著(2014)に収められた大英図書館蔵本の影印による。

以上のことから、『意拾秘伝』という書名においても、『意拾喩言』の場合と同じく、イソップの名は「意拾」であると結論付けることができる。

書名が「意拾+秘伝」という構成であるということになれば、「秘伝」をどのように解釈するかということが問題となる。「伝」には伝達を表す動詞（普通話の発音 *chuán*）と伝記や小説の類を表す名詞（同 *zhuàn*）という2つの可能性があるが、おそらく後者であろう。²⁰ もし前者であれば「秘伝」は“情報や知識を密かに伝える”こと、ないし、“密かに伝えられた情報”であることになる。しかし、図4で確かめ得るように、「意拾秘伝小引」はイソップ物語について、西洋各国に伝わり、それを自国語に翻訳して人々の啓蒙に使わない国はないとまで言ってその普及ぶりを紹介しており、「秘伝」を密かな伝承の意味で使っているという印象はない。

では、「伝」が名詞、「物語」であるとして、「秘」は何を表しているのか。すぐ上に書いた事情により、“秘匿された”や“世に知られていない”ということであるとは考えにくい。中国人の編んだ辞書で「秘」の語義を詳述したものを筆者は見出せないが、英国人宣教師ロバート・モリソン (Robert Morrison、馬礼遜) が編み、トームも使ったはずの中国語辞典 *A Dictionary of the Chinese Language, Part 2, Vol. 1* 『五車韻府』(1819年) に理解の手がかりになる可能性のある情報が見出される。同辞典の「秘」の項目では語義が次のように詳細に記述されている。²¹

Divine; that which cannot be fully explained; abstruse; secret; mysterious. (神聖な、十分に説明できないもの、深遠な、秘密の、不可解な。)

モリソンは「秘」を、通常の語義と言ってよいであろう“秘匿された”のような意味を超えて、“神聖な”、“深遠な”などの宗教的、精神的な意味にも結び付けて理解していたことが分かる。²² 『意拾秘伝』の「秘伝」は、“深遠な内容の物語”あるいは“一見平易だが深い含蓄のあ

²⁰ 注16で触れたように、Chen(2017)とBai(2019)も「伝」を *zhuàn* と見て *Yishi mizhuan* と書いていた。

²¹ 『五車韻府』は部首別の漢字辞典であるが、モリソンのアルファベット順の漢字辞典 *A Dictionary of the Chinese Language, Part 1* 『字典』, Vol. 2 (1822年) においても同様に説明されている。

²² モリソンがいかなる情報や判断に基づいて「秘」の語義をそのように記述したかは不明である。西洋人の編んだ古い中国語の辞書を参考にした可能性が考えられるが、狭い確認の限りではモリソンの「秘」の記述に類する早期の事例は見出せなかった。いずれにせよ、モリソンもしくはそれに先立って辞書を編んだ西洋人が中国人からそうした語義理解を引き出したのであろう。

『意拾秘伝』成書以後の時期に西洋人の編んだほかの中国語辞典を確かめてみると、Walter Henry Medhurst *Chinese and English Dictionary*, Vol. 2 (1843年) は「秘」をあっさりとして“Secret, mysterious” (秘密の、不可解な) と説明している。その一方で、Samuel Wells Williams *A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect* 『英華分韻撮要』(1856年) と同 *A Syllabic Dictionary of the Chinese Language* 『漢英韻府』(1874年) はモリソンの記述をさらに増補し、“inspired, as by an afflatus” (靈感を受けた)、“supernatural” (超自然的な、神秘的な)、“scientific, above the common” (科学的な、一般を超えた) などの語義を追加している。Wilhelm Lobscheid *A Chinese and English Dictionary* 『漢英字典』(1871年)

る寓話”といった意味を表そうとしたものではないかと考えられる。ただし、『意拾秘伝』という書名を考えたのはトームではなく Mūn Mooy であった可能性もある。モリソンの辞書を参考にして書名に「秘伝」を使ったわけではなく、モリソンの辞書の記述にあるような「秘」の語義の理解が中国語の母語話者に広くあったということかも知れない。

5 寓話 2 件の出所——「裁縫戯法」と「意拾勸世」

『意拾喩言』には先述の通り寓話が 82 話収められているが、内田氏はそれらが英国人の著述家 ロジャー・レストランジ (Roger L'Estrange) の編んだ寓話集 *Fables of Aesop and Other Eminent Mythologists, With Morals and Reflexions* (17 世紀) に基づいていること、そして、両書に収められた寓話がどのような対応の関係にあるかを明らかにしたうえで、しかし、『意拾喩言』の第 28 話「裁縫戯法」(仕立屋と手品師) と第 72 話²³「意拾勸世」(イソップ世を諫める) の 2 つについては出所が不明であるとしている。内田編著(2025)から関連の記述を引用すれば次の通りである。

「裁縫戯法」の方はいかにもイソップの話であり、他のイソップ訳から引いてきた可能性があるが、「意拾勸世」は果してイソップかどうかは疑わしい。(中略) いずれにしても、こうした【「意拾勸世」のように】水審を批判する寓話は本来イソップに見当たらず、ロバート・トームが何故これを採用して翻訳したかは謎であり、これも今後の課題としておく。

以下ではその寓話 2 件の出所について考察する。なお、「裁縫戯法」と「意拾勸世」は『意拾秘伝』にもあり、したがって寓話の出所の問題は『意拾秘伝』にも共通するが、ここでは『意拾喩言』に基づいて話を進める。『意拾喩言』によることには、併記された英文を考察の参考にすることができ、また、寓話に付せられた通し番号を論述に使えるという利点がある。

5.1 推定の概要

結論から述べれば、筆者の考えるところによれば、『意拾喩言』の「裁縫戯法」と「意拾勸世」の寓話はともに英国の詩人、小説家、劇作家であるオリバー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の書いた文章に基づいて作られている。

ゴールドスミスが 1760 年から翌年にかけてロンドンの雑誌 *The Public Ledger* に連載した随筆は 1762 年に *The Citizen of the World; Or Letters from a Chinese Philosopher, Residing in London to His Friends in the East* (世界市民—ロンドン在住の中国人哲学者が東方の友人たちに書き送った手紙) という 2 巻から成る匿名の書籍の形にまとめられた (Forster(1848)、Dobson(1888))。同書はその書名で繰

もモリソンや Williams の記述に近く、“mysterious, hidden, abstruse, deep, profound, secret; unaccountable;” (不可解な、隠された、深遠な、深い、深遠な、秘密の、説明のできない) と説明している。

²³ この「第 72 話」は『意拾喩言』で‘No. 72’と表示されているのをそのまま訳したものである。同書では‘No. 31’が重複しているために実際には第 73 話になる。以後に言及する他の寓話の連番についても同様である。

り返し再版されるのみならず、同人の著作集として編集し直されていくつもの異なる書名で出版された。出版の時期が『意拾喩言』に近いものとしては、*The Citizen of the World* の19世紀に出た版のほか、*Essays, Poems and Plays: By Oliver Goldsmith* (1825年)、*The Miscellaneous Works of Oliver Goldsmith, Vol. 2* (1837年)などの著作集がある。再出版に際して文面に若干の変更が施されていることもあるが、そのような差異はトームが著作に使った書籍や版の特定には役立たない。『意拾喩言』に収められた寓話はすべて底本を利用した創作であり、中国語文が底本の文章の忠実な翻訳であるわけでもなければ、英文もまた原文の通りではないからである。このことはレストランジの寓話集に基づく寓話にもゴールドスミス文章に基づく寓話にもあてはまる。

The Citizen of the World の副題に言う“ロンドン在住の中国人哲学者が東方の友人たちに書き送った手紙”という説明は、実際に中国人が書いた手紙ということではなく、ゴールドスミスが架空の外国人の視点から英国の社会や風俗を批評した文章であることを表しており、それはフランスの哲学者モンテスキューによる匿名の書簡体小説 *Lettres persanes* (ペルシャ人の手紙) (1721年)に触発されたものであると言う (Forster(1848))。²⁴

以下に、「裁縫戯法」と「意拾勸世」がゴールドスミスの“中国人哲学者の手紙”2通に基づいているとする推定について具体的に述べる。トームが使ったゴールドスミスの書籍や版は分からないので、かりに *The Citizen of the World* の初版 (1762年) に基づいて述べる。

5.2 「裁縫戯法」

『意拾喩言』の第28話「裁縫戯法」(仕立屋と手品師)——英文の標題は‘The Tailor and Mountebank’——の中国語文は次の通りである。句読点は適宜調整して引用する。括弧内に添えた日本語訳では『意拾喩言』における英訳の要素を一部補っている。

裁縫匠与変戯法者評論世事。匠曰、我只会裁縫別無所長、難以自護。何如足下多才多芸、定自不妨。戯者曰、汝勿憂。吾当授汝方法。遂将一二易学者教之。忽遇年歲饑荒、人民困苦。其戯法者經旬²⁵不發市、而裁縫匠究係世所必需尚能糊口。於是戯法者反求于匠人。俗云、百芸無如一芸精是也。(仕立屋と手品師が(先を見通せない)世の中について語り合った。仕立屋は言った。「私は裁縫以外にできないことがないから、(裁縫の仕事がなくなれば)我が身を守ることもむずかしい。貴殿は私と違って多才多才だから、困ることはないだろう。」手品師は「君も心配は要らない。方法を授け

²⁴ 手紙の多くは Lien Chi Altangi という名を与えられた中国人哲学者が北京にいる特定の人物に書き送ったものであるが、中には例外的にアムステルダムやペルシャの人物にあてた手紙や Lien Chi Altangi を受け手とする手紙などもある。

²⁵ この「経旬」は『意拾秘伝』における「経日」を『意拾喩言』で正したものである。“10日過ぎても仕事がなかった”という話であるが、訳文では話の分かりやすさのために“長いあいだ仕事がなかった”とした。

てやろう。」と言って、仕立屋に簡単な手品を1つ2つ教えた。（その後）突如として飢饉が起こり、人々は困窮した。手品師は長いあいだ仕事がなかったが、仕立屋は依然として人々に必要とされ、何とかやっていたことができた。そして、手品師のほうに逆に仕立屋に助けを求めることになった。ことわざに「百芸は一芸の精なるに如かず」と言う通りである。）

この寓話は *The Citizen of the World* 第1巻の‘Letter LVIII’、手紙58²⁶——第2巻末の目次で‘Proper lessons to a youth entering the world; with fables suited to the occasion’（社会に出る若者への適切な教訓およびそれにふさわしい寓話）という標題を与えられている——の一節に基づいていると見られる。当の手紙で中国人哲学者は、決断力を欠く若者はしばしば友人の助言を受けて何かの仕事を始め、別の友人の助言を受けてほかの仕事を始めるということを繰り返すが、職業は1つ決めてそれに専心すべきだと言う。

To know one profession only, is enough for one man to know; and this (whatever the professors may tell you to the contrary) is soon learned. Be contented therefore with one good employment; for if you understand two at a time, people will give you business in neither. (人は1つの職業を知っていさえすれば十分である。そして、1つの職業は（学者たちがいかなる違う意見を言おうと）すぐに身に付けることができる。だから1つのよい仕事で満足すべきだ。2つの仕事を同時に知っていれば、そのどちらでも仕事を依頼されないものだ。)

そして、その主張を補強するために続けて次のような寓話が述べられている。『意拾喩言』の英文での mountebank（手品師）はここでは類義の conjurer によって表現されている。一部の話の綴りが現代と異なり、セミコロんとコロンの混在も見られるが、すべて原文の通りである。

A conjurer and a taylor once happened to converse together. Alas, cries the taylor, what an unhappy poor creature am I; if people should ever take it in their heads to live without cloaths I am undone, I have no other trade to have recourse to. Indeed, friend, I pity you sincerely, replies the conjurer; but, thank heaven, things are not quite so bad with me; for if one trick should fail, I have a hundred tricks more for them yet. However, if at any time you are reduced to beggary, apply to me, and I will relieve you. A famine overspread the land; the taylor made a shift to live, because his customers could not be without cloaths; but the poor conjurer, with all his hundred tricks, could find none that had money to throw away: it was in vain that he promised to eat fire, or to vomit pins; no single creature would relieve him, till he was at last obliged to beg from the very taylor whose calling he had formerly despised. (かつて手品師と仕立屋が会話を交わしたことがあった。仕立屋は嘆いて言った。

²⁶ 58 という序数は *The Citizen of the World* の版によって若干異なることがある。後に言及する別の手紙の序数についても同様である。

「ああ、私は何と不幸な生き物なのか。もし人々が衣服なしで暮らすことを思い付けば私は終わりだ。私にはほかにできる仕事がない。」手品師は答えた。「確かに君には心から同情する。私はおかげさまで状況がそれほど悪くない。もし1つの芸で失敗しても、まだ百の芸があるからだ。しかし、いつでも生活に困ることがあれば言いたまえ。私が助けてやろう。」(その後)飢饉が国を襲った。仕立屋は何とか生活することができた。彼の客は(飢饉でも)衣服なしではいられないからだ。しかし、哀れな手品師は百の芸を持っていても、(それを見て)投げ与えるお金を持っている人は誰もいなかった。火を飲み込むとか瓶を口から吐き出すと言ったところで無駄だった。彼を助けようとする者は誰一人おらず、結局、以前はその職業を見下していた仕立屋に物乞いをせざるを得なくなった。

この寓話は「裁縫戯法」の内容に相当近い。話が細部に至るまで一致するわけではないが、それは先述の通りレストランジの寓話集に基づく寓話においても同様である(5.1)。「裁縫戯法」にこれ以上近似する文章を見出せるまでは、手紙 58 がその出所であると考えてよいであろう。

5.3 「意拾勸世」

『意拾諭言』の第 72 話「意拾勸世」(イソップ世を諫める)——英文‘Esop decries the use of Torture’——の中国語文は次の通りである。ここで括弧内に添えた日本語訳は内田編著(2025)におけるものの借用である。

加刺巴三千年前、国人未明道理、専好異端、而国法禁之最嚴。術士被拏者、驗有憑拋、即殺之。一日拏獲多人、正在繫縛手足、意拾過而問之曰、此何為者。衆答曰、此乃術士、今將試之。將其溺於池中浮水者、則為術士、當焚之於火。沈者則為良民、即捨之以歸。法之善莫過於此。意拾曰、惡是何法哉。夫如是、所獲者無一生命矣。浮者死於火、沈者死於水、均一死也。不如莫驗。如世上暴虐之官、往往不審虛實動以刑法求招、甚至傷殘肢体。招者則死於律、不招則死於刑、苟不致斃命、而傷肢体、能為之復原乎。不可不慎也。(バタビア(ジャカルタ)は三千年前は人々はまだ道理に明るくなく、専ら異端を好んだ。一方、国の法律ではこれ(異端)を厳しく禁じていた。術士たちは捕まえられ、証拠があれば即座に殺された。ある日、多くの人が捕らえられ、手足を縛られていた時、ちょうどイソップが通りかかり、そのわけを問うた。「これは一体どういうわけだ?」皆は答えて言った。「この人たちは、術士で、今、まさに尋問にかけられるところです。つまり、その人を池の中に投げ入れて、浮かんで来れば術士であり、火あぶりに処せられます。一方、沈めば善人であり、罪無くして家に帰れます。まさにこれ以上素晴らしい法はありません」と。イソップ曰く「ああ、何たる法ぞ。それならば、捕まえられた者は、すべて命はないではないか。浮かべば火で殺され、沈めば水死である。どちらも死あるのみ。むしろ、そんな尋問などすべきではない。」²⁷ まさに、世の暴虐な役人は往々

²⁷ 内田編著(2025)の日本語訳ではイソップの発言が閉じていないので、私意により引用符をこの位置に追加した。イソップの発言は寓話の末尾までのもに見えるが、この位置以後の内容はトーム自身の意見表明である(後述)。

にして真偽を審らかにせず、ややもすれば刑法でもって自白を強要したり、ひどい時には肢体を傷つけたりする。罪を認めれば律で死に至らしめられ、罪を認めなければ刑で殺される。かりに死には至らなくとも、肢体は傷つき元に戻ることはない。慎むべきである。）

これはおそらく *The Citizen of the World* 第2巻の‘Letter LXVI’、手紙66——巻末の目次で‘The fear of mad dogs ridiculed’（狂犬に対する恐怖を嘲笑する）という標題を与えられている——の一節に基づいている。その手紙で中国人哲学者は、英国社会で人々が狂犬に対して抱いている強度の恐怖心について語っており、そこに次のようなくだりがある。

Their manner of knowing whether a dog be mad or no, somewhat resembles the ancient European custom of trying witches. The old woman suspected was tied hand and foot and thrown into the water. If she swam, then she was instantly carried off to be burnt for a witch, if she sunk, then indeed she was acquitted of the charge, but drown'd in the experiment. In the same manner a crowd gather round a dog suspected of madness, and they begin by teizing²⁸ the devoted animal on every side; if he attempts to stand upon the defensive and bite, then is he unanimously found guilty, for a mad dog always snaps at every thing; if, on the contrary, he strives to escape by running away, then he can expect no compassion, for mad dogs always run straight forward before them.（犬が狂犬病にかかっているかどうかを見分ける彼ら（英国人）のやり方は、古代ヨーロッパの魔女裁判の慣習に似たところがある。

（魔女裁判では）疑いをかけられた老婆は手足を縛られて水中に投げ込まれた。泳げば魔女として即座に連れ去られ火あぶりにされ、沈めば確かに容疑は晴れたが（審判の）試験中に溺死させられた。それと同じように、（現代の英国で）狂犬の疑いをかけられた犬の周りには群衆が集まり、犬を四方八方からいたぶり始める。もし犬が防御の姿勢を取って噛み付こうとすれば、議論の余地なく有罪とされる。なぜなら、狂犬は常にあらゆるものに噛み付くからである。逆に、犬が何とか逃げ去ろうとしたとしても、同情は期待できない。なぜなら、狂犬は決まって人々の前を一目散に駆け抜けて行くものだからである。）

水審で試されるのが「意拾勸世」では異端者、魔術師で、手紙66では魔女の疑いをかけられた老婆だという違いはあるものの、話の型は共通である。

『意拾喩言』の巻末に添えられた注の1つである注11には「意拾勸世」について次のように書かれている。

This fable is founded on the mode of Trial by Judgment of God, so common in the dark ages.（この寓話は暗黒時代に広く行われた神明裁判の様式に基づいている。）

寓話の出所に関わる注はこれだけであり、「意拾勸世」がほかの寓話とは異なるところ——す

²⁸ teizing は teasing の古い綴り。

なわち、主たる底本であるレストランジの寓話集以外のところ——から取られたことを説明していると解釈することができる。「意拾勸世」は、『意拾諭言』において、寓話中にイソップ自身が登場して意見を語る唯一の寓話であるという点でも例外的である。

水審の話は繰り返し語られてきた一般的なものであるので「意拾勸世」だけに基づいて手紙66との関係を認定することはできないが、「裁縫戯法」との関係も考慮に入れれば判断は違ってくる。*The Citizen of the World*において当の2つの手紙は58番目と66番目というように互いに近い位置にある。2巻本の*The Citizen of the World*では第1巻の末尾と第2巻の冒頭に分かれるが、同書の合冊本では10頁余りの近距離になる。また、先に触れたゴールドスミスの著作集の1つである*Essays, Poems and Plays: By Oliver Goldsmith*においては2つの手紙はそれぞれ‘On the irresolution of youth’（若者の決断力の欠如について）と‘On mad dogs’（狂犬について）と題して連続して配置されている。こうした事実は、「意拾勸世」が「裁縫戯法」と同じ底本に基づくことを証明するものではないが、そうであった可能性を示唆する。

もし2つの寓話を切り離して考えるとすれば、「裁縫戯法」は*The Citizen of the World*に基づくと推定し、「意拾勸世」は出所が不明であるとするのが慎重な判断であろう。しかし、それでは問題の半分を解決するだけで、半分を未解決のまま残すことになる。2つの寓話と同じところから取られたと考えて問題全体をひとまず解決した形にするという総合的な見地からの判断を筆者は仮説として選択したい。

5.4 関連する問題

以上において、『意拾諭言』の2つの寓話「裁縫戯法」と「意拾勸世」はゴールドスミスの*The Citizen of the World*ないしそれに基づく同人の著作集を底本としているとの推定を述べた。

この推定に関わってさらに考えてみるべき2、3の問題がある。いずれも寓話創作の背景に関わることであり、満足な解決は望めないが、若干言えることはある。

第1の問題は、トームが『意拾諭言』に当の寓話2件を例外的に含めた動機は何かということである。

まず「裁縫戯法」について言えば、先に引用した通り、寓話は「俗云、百芸無如一芸精是也。」で終わる。実はそこに書かれた「百芸無如一芸精」ということわざはモリソンによる広東語辞典*Vocabulary of the Canton Dialect*『広東省土話字彙』（1828（道光8）年）の‘Part III Chinese Words and Phrases’に出て来るものである。ことわざの広東語での発音は省いて引用する。

百芸無如一芸精 To know a hundred trades is not so good as to know one perfectly, Jack of all trades and master of none. (百芸を知るより一芸を完全に知るほうがよい。何でもできるが何一つとしてすばらしくはできない人。)

「百芸無如一芸精」ということわざは19世紀前半までのほかの文献中には今のところ見出せ

ない。したがって、モリソンの辞書の編集時に英語の“Jack of all trades and master of none.”を訳して作り出されたものかも知れない。とすれば、モリソンの辞書における記載がトームによる「裁縫縫法」創作の原点にある可能性が推定される。もっとも、寓話に「百芸無如一芸精」を付け加えたのがトームではなく Mūn Mooy であった可能性もあり、そうであったとすれば推定は無効になる

「意拾勸世」については、対訳の英文中に注目すべき要素がある。「意拾勸世」は水審の場面とそれに関わるイソップの発言を述べたあと、「如世上暴虐之官、往往不審虚実動以刑法求招、甚至傷殘肢体。招者則死於律、不招則死於刑、苟不致斃命、而傷肢体、能為之復原乎。不可不慎也。」という拷問によって自白を強要する裁判の慣習に対する批判で締めくくられているが、この部分は物語の舞台であるバタビアに関する話ではなく、トームが清朝中国における同様の慣習の存在を述べ、それを批判しているものである。そのことは中国語文からは明確には読み取ることができないが、対応する英文が“This Fable refers to those fierce and cruel Mandarins in this world, ~”（この寓話はこの世における残酷無慈悲な役人たちのことを語っている。）であることから確かめられる。すなわち、“This Fable refers to ~”という言い回しはイソップの登場する場面がその直前で終わることを示しており、加えて、「暴虐之官」の「官」が一般的な public officials や government officials ではなく中国の官吏を表すのに多く使われた Mandarins によって表されていることもバタビアの役人の話ではないことを示唆している。トームは中国で生活する中で役人の被疑者に対する暴虐な扱いの話を目にし、それに対する批判を寓話に仕立てて『意拾喩言』に含めようと考えたのであろう。トームが寓話に清朝官吏の悪習に対する批判を含めたことは『意拾喩言』の‘Preface’に述べられており、内田(2001a)に指摘があるように「意拾勸世」以外の寓話にも見られる。²⁹

底本の推定に関わる第 2 の問題は、トームが寓話を追加するのにゴールドスミス の文章を利用したのはなぜかというものである。これについても確実な議論はできないが、トームは“中国人哲学者の手紙”として提示されたゴールドスミスの随筆に興味を抱いて読んだのではないかと想像される。そして、そのとき仕立屋と手品師の寓話を見てモリソンの辞書にあった「百芸無如一芸精」ということわざを思い出し——先の引用に見る通り、寓話には“哀れな手品師は百の芸 (hundred tricks) を持っていて、それを見て投げ与えるお金を持っている人は誰もい

²⁹ トームの見解の開陳との関連で付言すれば、トーム自身が第 1 人称として登場する寓話が 2 件ある。その 1 つは「意拾勸世」の直前に置かれた第 71 話「荒唐受駁」（ほら吹きやりこめられる）で、「余友人自小出外、曾經各国地方」（私の友人は幼いころから海外に行き、多くの国を訪れている）で始まり、話題の主を「余」——すなわち、トーム——の友人として導入している。対訳の英文でも同様に“A friend of mine, who had been abroad from his youth, had travelled thro’ a great many countries”と表現されている。もう 1 つは数話先の第 78 話「星者自悞」（占い師かつがれる）で、やはり「余於市鎮之上、見有亮江口之星相〜」（私は町で 1 人の占い師が〜しているのを見た）というトームの経験の記述で始まっている。

なかった”のように実際に“百の芸”が出て来る——、『意拾喩言』に新たな寓話として加えることを思い付いたのかも知れない。そして、ゴールドスマスの書籍をさらに少し読み進めば水審に関わる寓話が出て来る。トームはそれを見て、「世上暴虐之官」に対する批判を述べるための材料として利用しようと思ったのかも知れない。

以上の2点以外に、2つの寓話が『意拾喩言』巻末への付加ではなく、第28話と第72話という位置への挿入とされたのはなぜかという問題もある。しかし、これについて今述べ得ることはない。この疑問を解決するためには、まず82話の寓話の排列の根拠を解明することが必要である。

6 おわりに

ロバート・トームが広東人 Mūn Mooy の協力を得て著した中国語版イソップ物語である『意拾秘伝』と『意拾喩言』について、作者、書名、寓話の出所という3つの観点から考察を加えた。ここで述べた分析、推定の検証、誤りの訂正と記述の精密化については今後の研究に待ちたい。

文献

- 内田慶市(1994)「イソップ東漸—宣教師の『文化の翻訳』の方法をめぐって(あるいは中国文化への同化のみちすじ)—」『泊園』第33号(泊園記念会)
- 内田慶市(1999)「イソップ東漸—ロバート・トームと『意拾喩言』—」『関西大学文学論集』第49巻第1号
- 内田慶市(2001a)『近代における東西言語文化接触の研究』(関西大学出版部) [「第1部第3章 ロバート・トームと『意拾喩言』」]
- 内田慶市(2001b)「欧米人の学んだ中国語—ロバート・トームの『意拾喩言』を中心に—」狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』(京都大学学術出版会)
- 内田慶市(2001c)「日本に伝わった漢訳イソップ物語」藤善真澄編著『中国華東・華南地区と日本の文化交流』(関西大学出版部)
- 内田慶市(2004)「『遐邇貫珍』にみえるイソップ物語—中国語イソップ翻訳小史—」松浦章・内田慶市・沈国威編著『遐邇貫珍の研究』(関西大学出版部)
- 内田慶市編著(2014)『漢訳イソップ集』(ユニウス) [「イソップ東漸—中国語イソップ翻訳史—」]
- 内田慶市編著(2025)『漢訳イソップ集拾遺』(遊文舎) [「『漢訳イソップ集拾遺』解題」]
- 新村出校(1911)『文禄旧訳伊曾保物語』(開成館) [「西洋文学翻訳の嚆矢」]
- 新村出(1926)「意拾喩言」『明星』第8巻第1号(「明星」発行所)
- 新村出校注(1928)『文禄旧訳天草本伊曾保物語』(改造社) [「伊曾保物語の漢訳本 其二 意拾喩言」]
- 鈴木券太郎(1927)「『意拾喩言』補遺」『書史』第2冊(書史会)
- 天理図書館編(1972)『善本写真集 38 欧本イソップ物語』(天理大学出版部)
- 田島祥子(1999)「『意拾喩言』と『伊娑菩喩言』」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』第5号

- 中村忠行(1978)「忘れられた清末の翻訳文学二三」『野草』第22号（中国文芸研究会）
- 中村忠行(1985)「日中文学交流の一視点」譚汝謙編『日中文化交流国際シンポジウム論文集 卷二 日中文化交流：文学及び言語学習関係』（香港中文大学）
- 前坊洋(1990)「イソップ、東アジアへ」『近代日本研究』第6卷（慶応義塾福沢研究センター）
- 鲍延毅(1995)「《意拾喻言》二题」『枣庄师专学报』1995年第3期（枣庄师范专科学校）
- 段怀清(2007)『传教士与晚清口岸文人』（广东人民出版社）
- 黃時鑑(1996)「《東西洋考每月統記傳》影印本導言」王元化主編『學術集林』卷九（上海遠東出版社）
- 黃時鑑整理(1997)『東西洋考每月統記傳』（中華書局）[「《東西洋考每月統記傳》影印本導言」]
- 李长林(1987)「晚清时期中国关于古希腊文学艺术的介绍」『求索』1987年第3期（湖南省社会科学院）
- 李慶國(1994)「“林譯小說”前的翻譯小說」『中國文學報』第48册（京都大學文學部中國語學中國文學研究室內中國文學會）
- 孟紹毅・李載道主編(2005)『中国翻译文学史』（北京大学出版社）[「第一编（1897—1920）第一章 概论」]
- 施蛰存主編(1991)『中国近代文学大系 第11集 第28卷 翻译文学集3』（上海書店）[「寓言 一意拾喻言 解題」]
- 王海・陈常钰(2025)「《意拾喻言》译介的跨文化交流之道—兼论译名“依湿杂说”的订正」『安阳工学院学报』2025年第1期
- 吴义雄(2000)『在宗教与世俗之间—基督教新教传教士在华南沿海的早期活动研究』（广东教育出版社）
- 香港語言學學會粵語拼音字編寫小組編(2002)『粵語拼音字表（第二版）』（香港語言學學會）
- 熊月之(1994)『西学东渐与晚清社会』（上海人民出版社）
- 辛木(1992)「《伊索寓言》在中国」『全国新书目』1992年第2期（中国版本图书馆《全国新书目》编辑部）
- 佚名(1984)「副刊 贺锡翔编《西洋文学在中国近代的第一篇译作（外一篇）》」『书林』1984年第5期（上海人民出版社）
- 张伟(1991)「近代第一部《伊索寓言》的中译本」『新华文摘』1991年第8期（人民出版社）
- 趙利峰(2013)「1840年澳門版《意拾喻言》成書與出版問題叢考」『澳門理工學報』2013年第4期（澳門理工大學）
- Bai, Limin (2019) *Fusion of East and West: Children, Education and a New China, 1902-1915*. Leiden: Brill.
- Bai, Limin (2023) “‘Altering the original fables to suit Chinese notions’: A case study of Robert Thom’s *Yishi yuyan* 意拾喻言(1840)”. Charlotte Appel, Nina Christensen and M. O. Grenby (eds.) *Transnational Books for Children 1750-1900: Producers, Consumers, Encounters*. Amsterdam: John Benjamins.
- Chan, Leo Tak-Hung (1998) ‘Liberal versions: Late Qing approaches to translating Aesop’s fables’. David E. Pollard (ed.) *Translation and Creation: Reading of Western Literature in Early Modern*

- China, 1840-1918*. Amsterdam: John Benjamins.
- Chan, Leo Tak-Hung (2020) *Western Theory in East Asian Contexts: Translation and Transtextual Rewriting*. New York: Bloomsbury Academic.
- Chen, Song-Chuan (2017) *Merchants of War and Peace: British Knowledge of China in the Making of the Opium War*. Hong Kong: Hong Kong University Press.
- Dobson, Austin (1888) *Life of Oliver Goldsmith*. London: Walter Scott.
- Forster, John (1848) *The Life and Adventures of Oliver Goldsmith: A Biography*. London: Bradbury & Evans.
- Wong, Lawrence Wang-chi (2022) 'Sinologists as diplomatic translators: Robert Thom (1807-1846) in the First Opium War and his translation of the Supplementary Treaty (Treaty of the Bogue), 1843'. T. H. Barrett and Lawrence Wang-chi Wong (eds.) *Crossing Borders: Sinology in Translation Studies*. Hong Kong: The Chinese University of Hong Kong Press.